書評・紹介

小川一乗著

「インド大乗佛教における如来蔵・佛性の研究」

中村瑞隆

本書の内容を概観し別評しよう。

先ず序説では一、問題の所在と題して本書における課題が問題提起を含む形で述べられている。すなわち中観・瑜伽の二大思想に代表されるインド大乗佛教の中にあって、如来蔵・佛性思想が如何なる思想的立場に位置し如何なる思想組織を形成しているか、ということを体系的に解明するのが本書の課題であると云う。原始佛教以来の心性清浄・客塵煩悩説に結合せしめられ、一切衆生の本質として虚妄心を単純に否定した清浄なる心という程度の漠然とした実体的観念と理解されがちな如来蔵・佛性思想の根柢に、むしろ縁起空に基礎づけられた心性本浄（＝心は本性として空である）の論理が見出されるというspeculationを提示し、しかして如来蔵・佛性思想が大乗佛教の佛道体系として体系的に解明されるべきであることを指摘している。このような問題提起の仕方は如来蔵・佛性思想の共時的大乗思想の背景を想定する時には当然すぎるほど当然のことであろう。次いで二、所依の文献と題して、インド大乗佛教における如来蔵・佛性思想を体系的教理的に解明するためには経典（sūtra）の研究によっては充分に果されえないから、その目的で論述されている論書（śāstra）が必要であるとして、Ratnagotra-vibhāga-Mahāyānôttaratantra-śāstra（漢訳「究竟一乗宝性論」）が研究所依の文献として摘示され、加えてSkt.原典としての宝性論を確実に解釈するためには宝性論の原典に最も接近した時処にあって作成せられその註釈書として確実度の高い釈疏の解明が並行される必要ありとして、Skt.原典あるいは準Skt.原典としてのTib.訳の釈疏のない現在、ツォンカパ（Tsoṅ kha pa）の第一弟子・チベット佛教学僧ダルマリンチェン（Rgyal tshab Darma rin chen 1364～1432）の般若空観的立場からの註釈書宝性論釈疏（Theg pa chen po rgyud bla maḥi ṭīkā）が最適なものであるとして指摘される。著者の主張するインド大乗佛教における如来蔵・佛性思想の体系的研究および解明とはここで述べられている如く、宝性論を研究対象とし、ダルマリンチェンの宝性論釈疏をその所論の確実な解釈のために研究対象とするものであり、そういう意味では極めて堅実な研究方法と目的とをもったものであると知られる。もちろん宝性論は確かにその作者がインド大乗佛教における如来蔵・佛性思想を主題としそれを体系的教理的に解明したものであることは著者の言われる如くであるから、その所論は宝性論作者の解釈であり見解であるという問題の質的限界は論理的事実として残されていることは否めない。更に三、チベット佛教についてと題して、佛教研究の資料としてのチベット文献についての性格と意義とを述べ、加えて蔵外佛典（チベット撰述

部）としての宝性論釈疏の意義と価値とに関して抱かれがちな疑惑について、本研究においてその論理的内容の解明によって一掃される旨を暗示し、それこそ本研究の成果の一つであることをにおわせている。

さて本論は二部に編成せられているが、その第一部は宝性論における如来蔵・佛性――ダルマリンチェン造宝性論釈疏の解読――と題されている。

その中、第一章は宝性論の内容と題されて宝性論の思想史的性格と思想体系との解明についやされている。すなわち著者は先ず一、宝性論についてと題し近時の研究書を少しく紹介する。次に二、如来蔵・佛性の思想史的性格と題して、如来蔵・佛性思想が宝性論において如何なる思想史的性格を有するものとして取り扱われているかを究明している。すなわち如来蔵・佛性思想は般若空観思想の史的発展形態であり、縁起観→般若空観→如来蔵・佛性思想という図式系列において把握せられると云う。しかして山口博士の注意にもとづき如来蔵経による宝性論の所述と雑阿含十二の文面とを比較し更に釈疏を抄出し、如来蔵が縁起→空性→如来蔵という三次第の思想史的性格をもつものであることを証明している。更に宝性論に引用されて如来蔵思想のかかる三次第を実践面より具体的に述べる陀羅尼自在王経の文面に対する釈疏の解読を試みつつ、その三次第の内容を月称→ツォンカパ→ダルマリンチェンという中観思想の系譜をも配慮しつゝ詳しく検討している。その結果として如来蔵・佛性思想がダルマリンチェンによって空性（般若空観説）の方便分として理解されていることを指摘し、その思想史的位置を縁起説→般若空観説の発展々開として捉えようとしている。宝性論の思想史的立場はかつて山口博士（『般若思想史』八七～九一頁）によって、また高崎直道氏（A Study on the Ratnagotra-vibhāga pp. 54～62）によって論じられた所であるが、著者によってそれらの見解に確実性をもった新たな知見が加えられたと云うべきであろう。また著者は宝性論において示されたこの三次第（究竟一乗）と解深密経における三時教判（究竟三乗）との相違点に関するダルマリンチェンの見解を紹介し、声聞であれ独覚であれ一切の者が究竟的大乗的な在り方に帰一しなければならないという趣旨が究竟一乗ということの思想史的意義であると云う。また以上を理由として如来蔵・佛性思想が瑜伽唯識思想とは関連をもたない別系統の思想であることを結論的に述べている。三、宝性論の所論なる項においては、宝性論の教理体系の相互関係についてのみ重点的に釈疏を依用しつゝ略説している。すなわち七金剛句（sapta-vajra-pada）の中、(1)佛、(2)法、(3)僧の三宝は果であり、(4)界は果なる三宝を成就すべき自相続の質料因（upādāna）、また(5)菩提、(6)功徳、(7)佛業は他相続において成就されてある助力縁（sahakāra-pratyaya）であると云う。著者は殊に釈疏の「三宝を成就するという目的（果）のために、界（因）（＝如来蔵 tathāgata-garbha）を施設（upacāra）した」という一文の施設なる語に注目し山口博士の所論（『般若思想史』三九頁）を参見して、如来蔵とは縁起空であるものが世間的実用として施設された態

(空義 śūnyatā-artha) において語られているものであり、「勝義諦としての空性の世間的実用 (laukika-vyavahāra)」であると規定している。明らかに著者の創見として意義ある点と思われる。

第二章は漢訳語「佛性」の原語についてと題され、漢訳語「佛性」の原語についていくつかの角度から解明がなされている。先ずその第一の項で宝性論の思想解明においてその焦点となるテクニカルタームの一つ、すなわち如来蔵 (tathāgata-garbha) とシノニムと考えられる漢訳語「佛性」の原語を明確にする必要性を述べ、第二の項で漢訳宝性論に見出される佛性とその原語とを32ほど摘出し考査している。すなわち始めに例外的な三用例について検討を加え、次いで佛性に相当する原語28用例を、(1) buddha-dhātu, tathāgata-dhātu と(2) buddha-garbha, (tathāgata-garbha) と(3)〔buddha-〕gotra, tathāgata-gotra との三クラスに整理分類する。第三の項ではその Skt. 原語三クラス六語を Skt. 原典宝性論より摘出しその漢訳語を調査検討している。そこでは buddha-dhātu (あるいは tathāgata-dhātu) が佛教の一般訳語例から考察すると直訳的には佛界・如来界と漢訳されるべきであるのに、直訳態として佛性・如来性と漢訳されている点を留意する必要ありとして指摘する。更に buddha-garbha が直訳的には佛蔵 (=如来蔵) と漢訳されるべきであるのに一方で如来蔵と漢訳されつゝ他方で佛性と漢訳されている点を注目し、それによって如来蔵・佛蔵と佛性とがシノニムであることを予想している。また〔buddha-〕gotra が buddha-dhātu と共に佛性の原語として適切なものであるとしている。要するに佛性の原語としては buddha-dhātu が大勢として適当なものであり、佛性の概念もまた -dhātu, -gotra, -garbha によって規定せられていると見ている。第四の項においては大乗涅槃経における漢訳「佛性」の原語について考察し、その相当原語として tathāgata-garbha と tathāgata-dhātu とを水谷幸正氏の研究により指摘する。第五の項においては従来安易に還元 Skt. 原語として使用されている buddhatā と buddhatva とが漢訳「佛性」の原語でないことを留意している。しかして著者は第六の項において上の考察によって判明した佛性の三原語のシノニムとして結合するに至る経過および思想的関係の究明を残された問題として提示するが、本論文の目的が宝性論において大乗佛教として体系化された如来蔵・佛性思想の中でのこの三原語の意義を探索するにあることを表明する。以上の如く著者は漢訳語「佛性」を媒介としてその原語を詳細に探索することにより如来蔵思想の基本構造を解明するための確実にして正統的であると思われる視点を把捉しえている。また著者の指摘する三原語のあるもの、例えば gotra などが一方ですでに大乗その他の諸経典に探索されその思想的原流が解明されつゝあるから、著者の研究はそれに呼応して大きな意義を有していると思われる。

第三章は如来蔵・佛性の三種義と題され、そこでは如来蔵・佛性思想がインド大乗佛教において如何に理解々釈されているかが、殊にその中心問題である「一切有情悉有佛性 (sarva-

sattvās tathagata-garbhāḥ)」という命題の意味内容に焦点を置く形で解明されている。著者は先ずその第一の項で如来蔵・佛性という術語についてその意義を、宝性論の如来・佛が果で如来蔵・佛性が因であるとする基本的所論にもとづき、〝如来・佛を得るための因（hetu）〟〝佛・如来となるべき種姓（gotra）〟〝佛・如来がそこから生まれる胎蔵（garbha）〟と理解し、しかして如来蔵も佛性も依主釈の関係に理解されるべき合成語であることを明し、また釈疏の解釈を提示して佛・如来イコール佛性・如来蔵とする見解を厳しく否定している。第二の項では「如来蔵が有る（悉有佛性）」と説かれるべき論理的根拠であり「如来蔵が有る」ということの意味内容を説明する如来蔵・佛性の三種の義を、宝性論の所論および釈疏の解釈を抄出することによって明示している。第三の項ではその第一義「如来の法身（dharma-kāya）が遍満している義」について、釈疏の解説を参照しつゝ討究を進め、「法界の作業（はたらき）が遍満している」こと、すなわち「法界（dharma-dhātu＝聖法の因たるもの dharma-hetutva）の等流としての如来の聖教が常に一切有情にはたらきかけており、一切有情は何時でもその説法を聞きうる可能性の中にいる」ということを意味するものであると結論している。第四の項では第二義「如来の真如（tathatā）が無差別である義」について、釈疏を参照しつつ他面で如来と真如との概念とその関連性などをも考慮しつゝ討究を進め、しかしてそれは「真如（＝本性清浄、本性空）という本来性の意味において如来と有情とに差別がない」ということを意味するものであると結論し、しかも第二義の中に真如の如くにおかれていない有情において真如が開顕せしめられ有情が真如の如くにおかれていくという意味を看取しうると見ている。第五の項では第三義「如来の種姓（gotra）がある（sambhava）義」について同様に釈疏を参照しつゝ討究を進めている。すなわち先ず gotra について「本性住の種姓（prakṛti-stha-gotra）」と「修得完成せられたる種姓（samudānīta-gotra）」との二義ある点を、また前者によって法身（dharma-kāya）の、後者によって二色身（rūpa-kāya）の得られることを、更に前者から後者への悲的動向を看取し、しかして第三義は「真如が佛道修得の上で本性住の種姓（因）として表現され、その真如が佛道の修習によって開覚され修得完成されたる種姓（果）へと展開せしめなければならないという課題が一切有情に課せられている」という意味を示ものであると結論している。第六の項では以上に論明された三義について結論を略説し第一義を悉有佛性の還相的説明、第二義を本質論的説明、第三義を往相的説明と看做し、更に第一義における法身によっては慈悲的な宗教事実が、第二義における真如と第三義における種姓とによっては如来の智慧的な縁起空という根源的事実が示されていると解釈している。加えて釈疏の所説を引用してそれらの点を再確認し、最後にそれら三種義に対する解明の中に看取される一貫した点として、「悉有佛性」の意味内容が「佛教の勝義である般若空・真如が世間・世界に顕現して空の世界形成を果遂する意味のもの」として解明されている、ということを指摘している。第七

の項では如来蔵の三種義に関してダルマリンチェンが詳細に検討を加えている釈疏の「如来蔵品」の釈序に相当する部分についての解読（和訳）を適切な科文を附して載せている。アーラヤ識を真識と看做して如来蔵と同視するような立場への批判を指摘するなど、釈疏のインド的大乗的思惟方法に注意を求めている。以上の如く著者の研究には文献学的に確実な根拠を求め加えて解釈学的とも云うべき論理的な解明が附与せられている。それゆえ卓越した独創性の中にも客観度の極めて高い説得力が一貫している。また著者においては研究の前提となる speculation が少しく濃厚であるように見うけられるが、むしろその点が方法論的には成功を納めた要因なのであろう。

第四章においては「一切有情に如来蔵・佛性が有ると説示する必要性（prayojana）」を解明するために宝性論本文「為何義説品」に対するダルマリンチェンの釈疏の解読和訳が試みられている。著者によると、既に宝性論における如来蔵・佛性思想はその思想史的立場が第一章において、その思想的意味が第三章においてそれぞれ究明され、般若空観思想の発展々開した形態としての uttara-tantra であることが解明されたが、続いて如来蔵・佛性思想が何故に提唱されなければならなかったかという史的教理的必然性が解明されなければならない、というのが解読和訳の理由である。また釈疏において般若空観から如来蔵・佛性思想への思想史的展開が瑜伽唯識思想との対比によって解明され、三思想相互の性格が明かにされている点など現今の学界にとって考慮すべき内容が見られることなども和訳の理由の如くである。和訳には Tib. 原本の頁数と共に科文が詳しく附されている。また必要な限りの還元 Skt. 原語と補足語などをも添じ、加えて可能な限りの註記を附するなど、細心の注意と努力とが払われている。和訳の適否については Tib. 原本との対照の上で再読する機会を得ないので責任ある判断を下しえないが、一読した限りでは好完な和訳というべきである。同学の徒にとって必ず一見すべき良き参考文献となることは疑いない。

第五章は常楽我浄の四波羅蜜多についてと題され、如来蔵・佛性思想において如来蔵・佛性の果相として説かれる四波羅蜜多の内容が釈疏によって解明されている。著者は第一の項で大乗思想における波羅蜜多について概観して六波羅蜜多と四波羅蜜多との思想的異同を論じ、「浄我楽常の功徳波羅蜜多（guṇa-pāramita）である」という宝性論本文を摘示して四波羅蜜多を、〝究竟的境地に到達した状態〟という意味での六波羅蜜多に対し、そういう究極的な状態にある法身の功徳の内容を示しているもので、法身に対する四顛倒の対治という性格を有するものであると見ている。第二の項では果としての四波羅蜜多とその因としての「大乗法に対する信解等」との関係が、界（dhātu・如来蔵・佛性）の意味を正しく了解せしめるための十種義（artha）（宝性論第一章第二九偈以下）の中に含まれていることを指摘している。第三の項では四波羅蜜多としての常楽我浄の思想的意義を、宝性論と釈疏とを参照して四種顛倒としての常楽我浄および四種不顛倒との関係から解明し、その内容について

「有無の二辺を遠離した究竟的大乗の立場〃空亦復空〃」を表明したものと予見している。第四の項では四波羅蜜多の内容について宝性論本文（Skt. Text p. 31, l. 7～p. 35, l. 16）に対する釈疏によって解明を加えている。すなわち浄（śubha）波羅蜜多が因なる信解（adhimukti）にとっての果であり本性清浄と離垢清浄とを内容とするということ、（最勝）我（paramaātman）波羅蜜多が因なる般若波羅蜜多にとっての果であり人法二無我を内容とするということ、楽（sukha）波羅蜜多が因なる三昧（samādhi）にとっての果であり煩悩と所知との二障とそれらの習気（vāsanā）とを断除することによる苦の止息を内容とするということ、常（nitya）波羅蜜多が因なる大悲（mahākaruṇā）にとっての果であり大悲（と誓願とによる菩薩行）のはたらきの常恒性と（菩薩行の実践態である有無の二辺を遠離した）無住処涅槃のはたらきの常恒性とを内容とするということを究明している。第五の項において著者は更に四波羅蜜多の内容に関する釈疏の解釈を摘出し、四波羅蜜多が法身の功徳の殊別性（すなわち自性殊別、円満殊別、時殊別）として理解されている点を指摘し、かつ四波羅蜜多の内容の中に大乗の実践道としての空亦復空の表示を見出し、また四波羅蜜多の思想的根柢として法身の根本である般若と大悲との論理を看取しえている。以上の如くこの章では如来蔵・佛性の果相としての四波羅蜜多の思想的意義が釈疏の解釈を通して論理的に秩序正しく解明されている。

第二部は如来蔵・佛性の本意――結文としての試論――と題されている。

その中、第一章は智慧から慈悲への動向と題され、先の所論で充分に予想せられた如来蔵・佛性思想の本意の論理的軌跡を基礎づけている智慧から慈悲への動向について考察が進められ再確認の作業がなされている。著者はその第一の項で慈悲（maitreya-karuṇā）なる語の語源的意味を解釈学的に探索し、その意義を思想内容的に智慧の世間化・智慧の世間的実用（laukika-vyavahāra; empirical practice）と理解し、しかして智慧から慈悲へという必然的動向の基礎に両者の相即性という論理を見出している。次に第二の項で如来蔵・佛性思想が般若空観に対する批判として発展々開したものであることを、第一部第一章の二に論じた縁起→般若空→如来蔵という三次第の図式などをもって再確認し、如来蔵・佛性思想が般若空観の方便分であり世間的実用として実践的に顕出されようとした慈悲的なものであると見て、思想史的にも〃智慧から慈悲への動向〃の上で理解されるべきものであることを論明している。第三の項では宝性論において悉有佛性を解明するために示されている三種義の内容を再確認し、如来蔵・佛性思想が教理的にも〃智慧から慈悲への動向〃の上で理解されるべき性格のものであることを論明している。第四の項では智慧から慈悲への動向を説明する有力な表現方法として宝性論における四種の佛身説を挙示し、殊に法身（自性身）から色身（受用身・変化身）へという佛身説の中にその経緯の典型を看取し佛身説の意味を追究している。第五の項では如来蔵・佛性思想の教理史的な意義

が智慧から慈悲への動向の事実の上で悉有佛性と説かれている点にあるとし、悉有佛性の果相としての内容である四波羅蜜多によって示されている空亦復空という大乗佛教の実践道こそが智慧のはたらきとしての慈悲の究竟的な在り方であり内容であると見ている。第六の項では既に究明せられた所にもとづき、如来蔵・佛性思想の主題である悉有佛性の成立の基盤として、如来の智慧において一切衆生が本来の態として本性空（本性清浄）であるという根柢的な事実と如来の智慧のはたらきとしての慈悲によって一切有情がはたらきかけられているという宗教的な事実との二つの事実性を提示し、かつ如来蔵・佛性に対する理解としての佛の自性、自性清浄心、菩提心などの観念を本性空の背景のもとに再検討すべきであることを主張している。以上の如く第二部第一章は第一部において究明しえた如来蔵・佛性思想の根柢にある大乗の基本論理を哲学的思索ともいうべきレベルで統一的に要略し解明を加えたものであり極めて適正な論述よりなっている。

第二章は悉有佛性の意義――一闡提不成佛について――と題されている。著者は第一の項で如来蔵・佛性思想が如来の慈悲の事実を表示したものであるという点において本願（pūrva-praṇidhāna）思想と同一の思想基盤にあることを指摘している。第二の項では悉有佛性思想によって表示される智慧の慈悲（はたらき）という事実に対応して問題となる一闡提不成佛という課題における一闡提なる語について解明している。諸の辞書・索引の用例や大乗経典諸訳の訳語例を精査して原語 icchantika を確認し、語源語義の解釈をなして〝輪廻に愛執して佛法をかえりみない者〟の意味であると理解し、〝断善根にして般涅槃する性質（dharmaka）のない者〟と解釈されるべきものとしている。第三の項においては一闡提が(1)有佛性か無佛性かと(2)成佛か不成佛かという二点を悉有佛性との関連において問題としている。すなわち大乗涅槃経や入楞伽経および宝性論において一闡提の定義としてあげられる「槃涅槃する種姓（gotra）のない者」の意味について、大乗荘厳経論（第四の種姓品第十一偈以下）に対する安慧の註釈とダルマリンチェンの宝性論釈疏との解釈を探索して、悉有佛性の立場を否定するものではなく、むしろその立場に立ちながら現実的に般涅槃する性質のないものといわれても仕方のないような者が存在している事実を啓蒙的教誡的に非難したもので、いわば仮設（prajñapti）であるということを明らかにし、一闡提の有佛性なることを証明している。次に一闡提とは有佛性であることにおいて成佛すべき者でありながら現に成佛しえない者として不成佛であるという矛盾的な宗教的実存性を示しているものであると理解し、一闡提の不成佛を論明している。第四の項において入楞伽経の所説を引用して、〝善根を捨離して般涅槃する性質のない一闡提〟と〝一切有情のための無始時来の誓願のある菩薩にして畢竟じて般涅槃しない一闡提〟との二種あることを指摘し、後者を前者に対する如来の大悲利他の菩薩行として注目し、しかしてこの例をもって如来蔵・佛性思想における悉有佛性の意義は大悲無倦の事実を示すにあると結論している。以上の如く第二章は悉有佛性思想

において当然に課題として予想せられる一闡提不成佛の問題を取り挙げ第一部にて究明しえた諸見解を総合し思想内容の具体性をみごとに把捉し適正な結論を導出しえている。

以上概観別評した如く本論文は宝性論におけるインド大乗佛教としての如来蔵・佛性思想を、ダルマリンチェンの釈疏の解読を通して考察し、その思想体系の基本的構造を重点的に解明した始めてのものとして画期的な成果を納めたものである。学会にて予想せられていた種々の重要問題が信頼にたる資料とその公正な批判とにより確実な根拠の上に解明せられたことは斯学の発展のためによろこぶべきことである。多少その論述が煩瑣ではあるが問題の提起・展開・考証・帰結など論旨は一貫して明快である。論文全体を通して前提となっているかに思われる仮説も極めて安定度が高く佛教研究としては正統派に属する重厚さを有している。著者の所論が常に山口博士の見解に求心的に還元してゆく研究態度と浄土思想的発想に結合してゆく求道的態度とには不合理な点は毫もなく、むしろ若い学者としての学的誠実さと謙虚さとを思わせ好感のもてるものであることを最後に記しとどめたい。

（昭年四四年二月、文栄堂、A五版、一、八〇〇円）